『腰が抜けました。』
『ア情け無い男やなア。』
『其處を貴方様がたのお仲介で、何とか御氣嫌の直る様な工風が……。』
『あけへん〳〵。さア早ふ歸りッ。』
『フワーイ。……こら糞帳場。』
『ア痛た、、、、。コレ伊八どん何するね。人の胸ぐら絞めてどふや。放しんか。痛いがナ。』
『イヒ、、、、、（泣く）あゝ汝れのお蔭で潰物に成り損ふた。』
『そら何を云ふね。まア沈着いて話をして見い。』
實は斯々云々といふ。此事を主人に申しますと流石は大茶屋の主腹が大きい。ウム知らなんだ事は仕方がない。時の來るのを待つて御氣嫌を取り戻さふと、種々思案をして居る内に段々と盆が近附いて參ります。そこで大阪中の鰹節を買ひ占めて、是れを家形に拵りました。今日しも盆の十四日、様子を聽き合して見ると恰度飯の旦那が鴻の池に御滯在中と云ふ。是れ幸ひと右の鰹の家形に鳴物一式伊八が先尖へデンと乘つて采配を振ります。選り抜きの綺麗どころが二百人餘り、紅白の綱を引張つて賑やかに新地を繰り出しました。唯今の老松町から天滿の十丁目へ出て是を南へ、天神橋を渡つて高麗橋から今橋筋へ練つて參ります。鴻の池の御本家近ふ參りますと、伊八が家臺から飛んで降りる

なり、鴻の池の表口へ參りまして
『ヘェ鳥渡お願ひ申します。北陽の綿富から飯の旦那様へお中元で御座ります。どふぞお窓からでも御覽下さります様。』
表から此事を内らへ云ふて參りますと、飯の旦那。はてナ。どんな事をして來よつたのぢやろふとお居間の窓を細目に開けて御覽になります。此處で囃子に一層力を入れて、一同が手振揃えて踊りましたのが、後に浪花踊となりましたのや相で、伊八が窓の前で頭を下げまして
『ヘイ旦那様。先日は誠に有難ふムります。其後は御無沙汰を仕りました。今日は誠にお恥しい様な物でムりますが、お中元の印までにお目にかけます。』
『おゝ伊八どんか。いつぞやらは甚い御厄介になりました。今日は又お氣を遣はれた御祝儀有難ふ頂戴をいたします。どふぞ主人に宜しふ云ふとくなされ。いづれ近々に一遍よせて頂きましよ。』
『有難ふ存じます。是非お越しの程をお待ち申し上げて居ります。』
『ぢやが。貸して欲しいと云ふ物があれば、どふぞ何でも貸しとくなされや。』
『恐れ入ます。それでは旦那様。これで御免を蒙ります。』
又こゝで賑やかに一と踊りして北の新地へ歸て參りました。
『伊八どん、首尾はどふやつた。』